慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	台湾現代派文学の旗手王文興をよむ
Sub Title	Wang Wenxing : a vanguard of the modern school of literature in Taiwan
Author	金, 文京(Kin, Bunkyo)
Publisher	慶應義塾大学藝文学会
Publication year	1989
Jtitle	藝文研究 (The geibun-kenkyu : journal of arts and letters). Vol.54, (1989. 3) ,p.236- 265
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	村松暎, 藤田祐賢両教授退任記念論文集
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00072643-00540001-0236

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

台湾現代派文学の旗手王文興をよむ

金　文京

（一）

文学革命以来、現在に至る間の中国文学の中で、地方性という面からみて、もっとも特色に富む文学を生み出したのは、おそらく東北文学と台湾文学であろう。この南北にはるか隔絶した二つの地域が、その地理的辺境性ゆえに、近代において日本との間の不幸な経験を共有し、その対照的な風土の中から、各々中国本土とは一味ちがう独特の風格をもつ文学をはぐくんだことは、近代文学史上、もっとも興味深い問題の一つであるといえる。

第二次対戦後、東北地方すなわち旧満州は、新生人民中国の一部として、過去と訣別し、あらたなる歴史をあゆみはじめたが、一方の台湾は、周知の如く、依然として中国本土とは異なる政治経済体制の下で、独自の社会を形成している。そこから生まれた文学もまた大陸のそれとは非常にちがった様相を呈しており、かつ両者の差異は、ある意味では、解放（台湾では光復という）前よりひろがっているようにさえ思える。

このように近代中国文学の中できわめて特殊な立場にある台湾文学の現状は、残念ながら従来少数の例外を除いて、日本ではあまり紹介されることがなかったが、近年おもに台湾海峡両岸をめぐる情勢の急激な変化および台湾社会自体の変容にうながされて、ようやく関心が高まりつつあることは、まずはよろこばしい現象であるといわねばならない。

しかしながら、これまでのところ、関心の所在はいわゆる郷土文学派の作家と作品に偏重しているように見うけられるのであって、現代台湾文学のもう一つの重要な柱である現代派の文学については、ほとんど知られることがなかった。これは、日本における現代中国文学研究に、ともすれば政治的思想的な立場に固執しがちな傾向があることと無関係ではないように思われるが、ともあれ、現代台湾文学の全面的理解のためには、片手落ちの感を免れないであろう。

以下の文章で、筆者は、現代派の諸作家の中でもっとも特異な存在であり、ある意味では現代派の代表といっても過言ではない王文興の作品を紹介し、いささか論評を加えてみることにしたい。筆者は一九八五年四月よりあしかけ二年、台北に滞在した経験があるが、その間、この日本では一般読書界はおろか中国文学の専門家にとってさえ耳なれない名前の作家が、特に若い世代の知識人の間で、絶大な興味をもって読まれていることを知り、さっそく一読を試みた結果、その作品の中に、台湾文学のみならず中国文学全体にかかわるはなはだ刺激的な問題が提起されているという印象をもった。つねづね現代中国文学の門外漢をもって自任自負する筆者が、乏しい見識をかえりみず、ここにその紹介の筆をとろうとするのは、このために他ならない。

（二）

王文興（一九三九―　）は、福建省福州の出身、国民党が台湾に撤退する前々年の一九四七年、家族と共に渡台し、その後、名門の師範大学附属中学を経て、一九五七年、台湾大学外文系に入学、在学中の一九六〇年に同級生の白先勇、洪知恵（欧陽子）、陳若曦などと共に雑誌『現代文学』を創刊し、西洋の新しい文学の紹介につとめるかたわら、西方の文学理論に影響をうけた創作作品を発表した。これがいわゆる現代派文学運動の発端であり、この派はまた学院派とも

よばれることになるのである。卒業後は、白先勇とともにアメリカのアイオワ大学に留学、小説創作クラスに学んで修士号を得て帰国し、現在は母校の台湾大学外文系教授として主に英米文学などを講ずる一方、精力的な創作活動をつづけている。

一般に現代派作家の中では、『台北人』の作者、白先勇がもっともよく知られているが、そのほかならぬ白先勇の回想によると、『現代文学』当時の理論面でのリーダーは王文興であり、創刊号でカフカを紹介したのをはじめ、多くのアイデアが王文興によって出され、実行に移されたという。その後の二人の作品をみても、白先勇が主題、文体共に伝統的古典文学の影響を強く受けているのに対し、王文興は終始一貫して現代西方の文学理論にもとづく実験的創作をつづけており、少なくとも表面的には、彼は台湾ばかりでなく中国全体の文学者の中でも、もっとも徹底した、もっとも極端な西洋主義者であろう。ただし、『現代文学』の同人は卒業後すべてアメリカに留学したが、うち台湾に帰ったのは王文興一人だけであった。彼は単なる崇洋主義者では決してないのである。

帰国後の王文興は、大学で教鞭をとる以外はほとんどの社会的社交的交際を絶ち、ひたすら創作に専念している。彼自身の語るところでは、彼は毎日わずか六、七十字書いてはそれを推敲するという生活を十年一日の如くつづけているが、これは、のちに述べるように、彼が文章と文字に対して異常なほどの執着をもっているためである。この文章文字への執着は、一方では極端な精読の提唱となってあらわれ、彼は人の小説を読む場合、一日に十ページしか読まぬと告白すると共に、読者に対しても、自らの作品を一時間千字のペースで読んでほしいと要求する。彼のこの奇説、奇行、すべてをなげうって文学にうちこむその真摯な態度と情熱は、台湾ではすでに伝説とさえなっているようである。

このような文学的主張は、王文興をして必然的にきわめて寡作な作家たらしめた。現在までに彼が発表した作品は、

初期の短篇集『玩具手鎗』と『龍天楼』―のちにこの二冊を合訂して『十五篇小説』（一九七〇）としたー、長編の『家変』（一九七三）と『背海的人』（一九七九）だけである。しかも『十五篇小説』は、『現代文学』およびアメリカ留学時代の習作というべきであり、また『背海的人』は前冊が出ただけの未完であるから、実質上の完成した作品は『家変』だけということになる。しかし彼はこの一作だけによっても、すでに十分すぎるほどのセンセーションを台湾の文壇と社会にまきおこしたのである。ここでは、以下主に『家変』の内容を紹介し、他の二作については必要に応じて、また紙幅の許す限りにおいて触れることにしたい。

『家変』は、表面的には一種の家庭小説であるといえるだろう。主人公の范曄は某大学歴史科の助手、その父范閩賢は福州の旧式の知識人、いわゆる「書香門第」の出身で、フランスに留学した経験があり、光復後の台湾に家族と共に渡り下級公務員となる。母はその後妻で、別に異母兄の范侖淵がいる。この范家には、同じく福州出身の王文興自身の家庭が多少ともモデルになっているように思えるが、それはともかく、物語は范曄と家族との関係、特に父范閩賢とのそれを軸に展開し、全体が層の異なる二つの部分に分れている。

まず第一の部分は、幼時から成人するまでの范曄の回想からなる。この回想部分は、さらに1から157までの長短さまざまー長いものは数千字、短いものはたったの一行ーの節に分れ、断片的に、しかしほぼ時間の順序を追って、さまざまな出来事や思い出が語られる。たとえば1は、一家がまだ厦門（アモイ）にいた頃、父に連れられて町を歩きながら、店の看板の「大」「門」「人」などの字を指しては読み、父の肩車にのって家に帰った記憶。次の2は、台風の日、窓の外の木槿の樹が風に大きくゆれるにつれ、部屋の中が一瞬あかるくなったり暗くなったりするが、その樹の上に一羽の鳥が微動だにせずとまっていたという情景。そして3は、

母親寝室窓頂気窓上的彩色玻璃

母の寝室の窓の上の換気窓の色ガラス。

と、わずか十四字にすぎない。各々の節は独立した一つの場面であり、全体はその積み重ねである。このような趣向が、いわゆる意識の流れ、もしくは映画のモンタージュ手法を取り入れたものであることは明らかであろう。

范曄は幼い頃、父と母のどちらが好きかと聞かれると、迷ったあげく、父の方にゆくほどのおとうさん子であった(4)。父がなにかの用事で帰りがおそいと、彼は不安になり夜おそくまで家の外で父の帰りをまつ(44)。ある時は、突然父母が死ぬのではないかという恐怖に陥り、なにか自分が苦しみを受けることによって父母の死を遠ざけることができると考え、自分で自分の頬を打つ(90)。しかしその反面、息子の心の中には父に対する敵意もまた徐々にめばえてゆく。ふとしたことで父に打たれた彼は、父を怨み、父を殺したいとさえ思う。とじこめられた部屋の中で、彼は家を出て二度と帰らないことによって父母に復讐することを空想し、そこにある種の満足と快楽を見い出す(48)。この父と子の見えない対立は、息子の成長につれ次第に顕在化し、父と戯れに相撲をとった息子は、父をころばせてよろこぶまでになる(91)。

そして遂には、一介の下級公務員たる父とその家庭の醜い現実が、彼の前に露呈するのである。金銭をめぐる父母のいさかい、母の嫉妬、異母兄と母との葛藤、女友達との交際を禁止されて家を出る異母兄と父との確執、華僑のペテン師にだまされる父の愚かさ、父の役所での不正、台湾人の洗濯女に払う金がないのを隠すため彼女を泥棒よばわりして追い出す母の卑劣さ—これらを通じて、彼の両親への幻想は完全に破綻する。かつて子供の目に大きくたのもしく映った父は、その実貧相な小男であった。子供心にひそかに自慢に思った美しい母も、今では服装のやぼったさが目につく

ばかりである。やがて父が定年で役所をやめ、息子が大学で職を得ると、父子の関係は完全に逆転し、子は父を虐待しはじめ、父母を奴隷の如くにみなす暴君として家庭に君臨するにいたる。それに対し、母はただなす術もなくおろおろするばかりだが、父は息子の虐待に耐えかね、遂にある日、だれにも知られぬようそっと家を出る、というのが最後の157である。

この回想の部分が、主人公の内面世界と過去に属するものであるとすれば、もう一つの部分は、表層の現在を記述する。この部分の冒頭は回想部分の最後、すなわち父の失踪に始まり、AからOまでのアルファベットがふられた十五の節に分れ、父の失踪を知った范曄が、まず父の行きそうな知人にあたり、新竹（台湾中部の都市）に住む異母兄に電話をし、ついで父が家出したことを悟ると、警察に届け、新聞に尋ね人の広告を出す、それでも父の消息は杳として知れぬので、遂に休暇をとり、身寄りのない老人が行きそうな台湾中の寺院、廟、教会などを歴訪するという風に続く。しかし父の行方は容易にはつかめず、そのうちに探索への熱意は次第に冷め、ついには実質上父の探索を断念するに至る。そして約二年後、母と子は、二人だけの生活が、父のいた時分にくらべてずっと愉快であり、自分たちが以前よりはるかに健康であることに気がつくのである。

小説はまずある風の強い日、父が失踪するAに始まり、息子が父を捜して旅に出るまでが、BCでつづいて述べられ、次は回想部分の1となり、以後157までの間、適当な間隔でD以下の探索行が挿入され、過去と現在の時間が交錯する仕組である。またアルファベットの探索の部分は、みな「尋父」もしくは「父親」の二字を大文字で冠する新聞広告に始まり、回想部分の中に分散されることによって、あたかもリフレインのような役割を果す。そして157の父の家出が冒頭のAにつながることによって時間の円環は完結し、最後は、二年後の母子の「幸福な」状態を述べたOがおか

れ、全書が完了する。

この作品に対するまず第一の評価は、その主題―子の虐待による父の家出―が、中国の伝統的な道徳に背く(「離経叛道」)というもので当然あった。この道徳的非難は、まず保守的な知識人および一般の社会から、ついで一部の郷土文学派の人々から発せられ、その後は大陸における台湾文学研究者によってもくりかえされているようである。そればかりでなく、このような非難、というよりむしろ衝撃は、西洋文化の洗礼を受け、「欧風日雨」に暴されているはずの現代派知識人の間にも実はみられるのである(1)。たとえば、香港出身で台湾大学外文系卒業後渡米、教鞭を取りながら文芸批評に活躍する劉紹銘は、当初『家変』の叛逆思想と文章を受け入れることができなかったが、やがてこの作品が、人心の真相を描いた勇気ある写実小説であることを認識したと告白している。また王文興と共にかつて『現代文学』きっての理論派であった欧陽子の、「読後、どのように理性と感性とを調和させ、父母と家族を愛しながらしかも自我の独立を保つことができるか反問せざるを得なかった」という感想も、非難ではないが、同じような理解の延長上にあるといってよいであろう。この点、台湾はむろんのこと在米中国人エリートの意識は案外保守的であるとの印象を筆者はもった。

これに対して『家変』を擁護する論調の代表は、台大外文系教授顔元叔の「苦読細品談家変」であろう。顔氏は、『家変』の内容、文章の双方にわたって細かい分析を試みたのち、この作品が現代中国小説の傑作の一つであると認めた上で、その傑作たる所以を一言で述べれば「真」にあるとする。その言わんとするところの中心は、要するに、この作品が過去の中国では主に道徳的理由によって直視することをはばかられた父子の間の敵意を始めとする人間の本性のさまざまな側面を如実に描き出した、ということであろう。この理解は、劉紹銘の写実小説論と同じく、結局は保守主義者たちの道徳的非難を裏がえしたものに過ぎない。両者の作品理解は一致しており、ただその評価の方向が正反対なので

ある。欧陽子のさきの「反問」は、この両者の間にはさまれた思案投首から発せられたものであろう。

『家変』の中に、「父慈子孝」の伝統的観念が崩壊しつつある現代台湾の社会がかなり赤裸に、したがって一部の人々には衝撃的と受け取られるように描かれている面があることは否めない。またそこから、范曄は『紅楼夢』の賈宝玉と同じく、封建道徳に対する叛逆者であり、『家変』は伝統文化の解体を象徴するという見方がでてくるのも当然と思える(2)。このほか、特に范曄と母の関係について、恋母情結（エディップスコンプレックス）を指摘する論者が多いが(3)、現下台湾の文学研究において、フロイドとユングがいかに流行しているかを知る筆者にとって、この説はむしろ陳腐に感じられる。王文興はフロイドの学説を彼の作品の中に応用したかもしれないが、それは彼の主題ではないであろう。

『家変』発表以来、台湾では以上のような問題をめぐって、賛否こもごも議論沸騰し、ついに「家変座談会」なるものまで開かれたのであるが、その席上まず発言した『城南旧事』の作者として日本でも知られる林海音が、「大変この作品が気に入っています。再読してもちっとも興趣が衰えないほどです」と絶賛しながら、その根拠を具体的には述べず、のち劉紹銘に「林海音が『家変』をほめるのは、きっと彼女が母親だからだろう」と皮肉られたように、進歩的と目される文学者、知識人の間には、この作品についてあからさまな批判をはばかるような雰囲気されみられる。実際、劉紹銘や欧陽子にしても、この作品の主題や構成の革新性についてはある程度評価しても、その文体は受け入れ難いというのが本心のようだ。

これに対して当の王文興自身は、内容について、「いつでも起こりうることだ」というのみで、特別の社会的意味づけを拒否する一方、文章は無視して内容のみを評価する見方には猛烈に反撥し、「『家変』の文章はそっちのけで内容のみ問題にする読者がいるが、自分としては、むしろほかのことはどうでもよい、ただ文章だけを見てほしい」と序の中で

要望している。筆者もこの作者自身の要望を尊重して、内容の紹介はこの程度にとどめ、次に文章の分析に移ることにするが、その前になお一つだけ指摘しておきたいことがある。

それは、すでに顔元叔もいっていることであるが、この作品の中に、五十年代、六十年代における台湾の下級公務員とその家族の暮らしぶりが非常にリアルに描かれていることである。外省人たる范家をめぐるさまざまな人間関係―台湾人の洗濯婦、海外の華僑―は正に光復後の台湾社会の縮図であり、作者がその種の生活を熟知していること、そしてそれを細密に描くことによって現代台湾社会の断面を抉り出そうという意図をもっていたことは明らかである。その意味でこの作品は、台湾ニューシネマのリーダー、侯效賢の「童年往事」などとも一脈通じるものがある。しかもこのような傾向は、実は王文興の初期の作品ですでにあらわれているのである。

たとえば『十五篇小説』の中で、台北の三輪車（高度経済発展期以前の台湾都市部の重要な交通手段であった）こぎの生活を描いた「大風」、家族の反対を押し切って外省人と結婚した台湾人の女が、ある日、香港の調景嶺(4)から突然舞い込んだ夫の大陸に残した妻からの手紙をみて動揺し、ついに自分が洗濯婦として働き、夫にはつとめをやめさせ、家族を養うことによって夫を独占するという内容の「両婦人」（台湾人洗濯婦は『家変』にも登場する）、台湾北部のとある漁村を舞台に、聖母媽祖の誕生節の日、獅子舞をおどり狂い最後は力尽きて血を吐いて死ぬ山地人（台湾の原住民）の漁師薩科洛（サコロ）の姿を描いた「海濱聖母節」（山地人はその大部分が今日の経済発展から取り残され、文化的アイデンティティーを失いつつある、特に近年の遠洋漁業の発達につれ、多くがその乗組員となり、今や山地人は一部ではあるが海洋人となりつつあるという）など、いずれも台湾社会の底辺を郷土色濃く活写して余すところがない。

現代台湾文学史上最大の論争である七十年代の郷土文学論争の中で、王文興は郷土文学に批判的であったため(5)、王

拓をはじめとする郷土文学側から集中攻撃をあびた。しかし王文興のこれまでの文業を虚心に眺めるならば、彼の作品の多くには郷土文学と一脈相通じるものがあることが容易にみてとれるであろう。まして郷土文学が、台湾における現実主義文学として自らを措定するならば、文体や手法はともかく(こちらの相違の方が重大である)、内容主題面で王文興を排斥する必然性は、少なくとも作品をみるかぎりにおいては希薄なように思える。郷土文学論争は、きわめて政治的な状況においておこなわれ、文学的にはどちらかというと未熟であったとするのが現時点での一般的な総括であろうが、その過程で、右のような王文興の文学の本質的側面が見落とされたことは残念である。この点は、これまで台湾でもあまり注意されていないようであるが、王文興の文学を理解する上できわめて重要であるように筆者には思える。

因みに、未完の長編『背海的人』は、詐欺をはたらき台北から深坑澳という架空の漁村に逃れ、人相見で生計をたてる主人公が、海の見える浴室にとじこもって際限なく続ける独白から全篇がなる。独白によって語られるさまざまな事実は、要するにやはり台湾社会のある種の象徴にほかならないが、媽祖廟のある閉鎖的な漁村に闖入した異邦人という設定の原型は、おそらくは先に触れた「海濱聖母節」にあるであろう。

(三)

「文字こそ作品のすべてである」—これは、『家変』新版序をはじめとして、王文興が機会あるごとに力説してやまない彼の文学観の根幹である。彼が自らの読者に対して、一時間千字の精読を求めていることはすでに述べた。しかし彼の文章、文体に対する一般の評価は、「離経叛道」と判ぜられたその内容、主題に対するよりも更に厳しく、「怪詞異句」、中国語の破壊者というものであった。本来ならその最もよき理解者であってよい欧陽子でさえ、「王文興の風格が、空前

であるばかりでなく絶後とならんことを希望する」と、暗に批判の意を寓する。彼を擁護したのは、顔元叔および台大外文系出身の二三の批評家のみであった。彼の怪異な文体をどのように評価するかは、彼の文学全体をどのように評価するかの関鍵となるであろう。

王文興の文体の分析は、すでに欧陽子、張漢良等によって試みられているが、ここではその文章、用字に対する筆者なりの分析の結果を、主に『家変』を材料にして列挙することにしたい。（ ）内の数字は、洪範書店版『家変』（一九七八年初版）のページ数、また『十五篇小説』と『背海的人』の例を示す場合は（ ）内に「十」、「背」および、やはり洪範書店版のページ数を記す。また右側傍点は筆者による。

（1）顚倒―語彙を通常とは逆の語順で用いる。望希(68)、索枯(79)、体身(122)、怖恐(123)、已業(124)、虧幸(134)、悟覚(142)、声雑(179)、風颱(163)、鬧熱(十175)、用使(背29)等、枚挙に勝えない。うち風颱のように閩南(台湾)語を用いた場合もあるが、大部分は奇異な印象をあたえ、中には「声雑(＝雑声)」の如く非文法的な例もある。

（2）重複―一つの文中に同一もしくは同一義の語彙を、意味上は不必要にもかかわらずくりかえす。

曽經去過他父親的機關裏去過一次。(118)

一定隔壁的隣人在深夜寂静内一定必然聽得。(132)

我已經腦満腸肥了已經。(背123)

貞操、難道、在嘴唇皮的上頭在嗎？(背156)

最後の例は、上の「在」を介詞ととることも可能かもしれない。このほか、「猫児要毎時毎刻都在我身邊。都在

我身邊。」「哦不不不眞要笑死人了。」「是真的是真的是真的」（以上みな十30）のような単純なくり返しがあり、特に『背海的人』で極端な形で頻用される。たとえば、「爺推測了牠出来的個的的的個的的的個是大好天、大大、大好天。mmmh、等一等等等　等等　等等等等看。……不好久、忽然唏哩嘩啦啦嘩啦啦唏唏哩哩哩之間、潑下一吼啦的一一洩而下的豪猛強暴「」∠雨而来了的個的個、茲此以外、又還外加的個的另補添上一轟龍雷、（這簡直是、幾幾乎幾幾乎乎幾幾幾乎幾幾幾乎是　不可能的一件事情――冬天的雷！）。」（背71）

実に読者を辟易させるメチャクチャな文章というべきである。

（3）特異な語法

他説不定以後會做個唸書人出来也許呢。（35）

外公外婆也変鬼已經。（36）

你不要再給我到這裏来了以後。（背9）

他在這些詩中最受他熱愛的一首是。（81）

他眞的不應該這麼早就被人把他給人来給他害死掉他。（背103）

「也許」は、「説不定」と意味が重複する。「已經」「以後」の後置は英語の影響かもしれない。最後の二例は、形式上の主語と、述語部分から想定される主語とがねじれる語病句である。すなわち前者は、「他在這些詩中最熱愛的一首」と「在這些詩中最受他熱愛的一首」の混合、後者は、「他真的不應該這麼早就被人害死掉」で足りる。

（4）文言の混用

「不、下次再去、今天不行。」爸爸勒住脚足謂。（91）

他的父親發覚他的二哥已經過十幾天日没給家裏貼補矣。（120）

俟之進来時他二哥并未擡頭與他爸爸招呼起。（120）

受風寒的原因顯著易見的是起於他的之於前一日的早上起身的時候。（194）

説實話、我的所以的多半不曽留下那應留的一截、是因為我之個人的貪婪之所以致之之以致之者是也。（背33）

文言と白話の併用は現代中国書面語の趨勢であるが、王文興の場合、両者を故意にきわめて「不調和」に用いる。なお『背海的人』では純然たる文言句に近いものがあらわれる傾向がある。

「此其又何異之於堆一車的牛糞!?」（背15）

「此處其極目所至之處垃圾棄地之多的確是無復出其右者也。」（背19）

二例とも文言の品格に相応しないもの―牛糞、垃圾（ゴミ）―をわざと文言で述べる。

（5）助字の多用

那次遲回来後他底爸爸復再又曽甚好數次遲時回返。（49）

你的確比起他們起来都還比他們還不如。（147）

これは（2）の重複とも関係するが、特に助字の重複多用は、文を冗漫なものとする。例えば後者の例は、「你的確比他們還不如」でよい。

（6）擬態語、擬声語の多用

踏在舞臺平裏敲發空咚空同底響音。（73）

風把一片空其控奇的聲響傳来。（77）
從枕上常可聽得遠處黒風一道道渡来空其空氣的鐵路機車車輪輪響。（97）
世間之上的韓八朗一切的快楽。（背18）
這一些抗巴朗當的個底弔七掛八玩意兒。（背53）

これらの擬態、擬声語は右の例にみるように表記がまちまちである。その多くはおそらく作者の創造にかかるであろう。なお三番目の例では、「機車車輪輪響」も一種の擬声とみなしうる。

（7）見なれぬ語彙

於七月末秋季新伊的夜央。（97）
然則經驗已經訓孕得他明識志望不能置放得太「上」。（144）
掙兔出了他們的家（147）

おそらく作者の造語であろう。「新伊」「夜央」は一見文言のようであるが、伝統的用法ではない。

（8）通常と異なる用字

那笑顔常教他見時感覚歡曜。（44）
你平長都不大晒太陽。（98）
甚麼菜伊鴉？（110）
你竟然遮麼様糟蹋這一個日子。（112）

「這」を「遮」と書くのは唐宋の用字に一致する(6)。

(9) 造字—助字や擬声語を中心に相当数がある。

好極嘞。(34) 你今兒中午在家吃飯吧。(66) 去拿冷開水潞、瀜、一下嘴腔。(81)

(10) 注音符号、ローマ字、簡体字の使用

爸走了Y、再見ㄋㄧㄢ。(55)

Hey, 猜一猜ㄅㄨㄣ。(139)

识得出人。(139)

(11) 種々の記号の使用

你不聽医生的話。(22) 是不是她死了?。(127)

その他、傍点、ゴジック体も頻用する。なお記号ではないが、

然後他父親問:「　他的東西都拿走了嗎?」(147)

の二字分の空白は言葉の間を表現したものと思える。この手法は『背海的人』では更に多用される。

(12) 方言の使用—風颱(163)、頭家(36)などの閩南語の他、福州語が相当あるといわれるが、筆者には残念ながら判別できない。

(13) 諺、成語の使用—特に『背海的人』に顕著であり、かつ大部分が何らかの程度においてパロディー的である。なお「垂手可得」(179)のような、元来のかたち(「唾手可得」)の変形もある。

(14) 冗長な文—重複、助字の多用などの結果、全般的に文が長く、そこにこれまでの中国語の文章とは異なる一種独特のリズムを生み出している。たとえば、「那一次的事件出生在他的媽她看見及他的父親和一個同宿舎裏邊住

着的孀寡的中年女職員於踏下交通車後併肩一夥走、因而她就狐疑到那一個女職員和他是否有私事。」（160）

（15）最後にこれは文体とは直接関係ないが、王文興の文にはしばしば絵画的、もしくは詩的な手法をとりいれた句があることを指摘したい。たとえば、

夜晩放置月光牌蚊香的鳥鳥淡煙。

深夜時他聆及蟄蟲的響顫像耳鳴。（68）

右の二句、一は視覚、一は聴覚にかかわる微細な事柄を、同じ字数で、あたかも対聯の如くに並べる。がしかし、内部の構造は、故意に対句の対照性を破っている。

以上は筆者が気付いた範囲での不完全な挙例に過ぎないが、これだけでも王文興の文章がいかに特殊で風変わりかを知るには十分であろう。常識的な中国人読者が拒否反応を起こすのは予想に難くない。これでは「怪詞異句」の非難もやむを得ないと思える。

ここで、この「奇文」についての筆者の感想を述べる前に、まず王文興の擁護者たる少数の批評家の意見に耳を傾けてみたい。まず顔元叔は、内容についての場合と同様、王文興の文章についてもその「真」である点、もしくは「伝神」「精確」であること、要するに写実性を賞賛する。たとえば、冒頭で父親が家を出る場面の、「他直未再轉頭、直走到巷底後轉彎不見」は、生疏な耳なれぬ文体であるが、二つの「直」は家出の決心の堅さを暗示し、また「轉頭」は「回頭」より、「轉彎」は「轉角」よりこの場合精確であって、全体としてきわめて「伝神」、つまり眞に迫っているとする。また「望希」のような顚倒や特殊な用法についても、それが常套的語法―陳腔濫調―を脱して、生動感、真実感をもたらすものとして評価する。たしかに奇異な語法や用語からなる王文興の文体に、言語の惰性を打破し、読者に衝撃をあた

えることによって、より本質に迫る効果があることは否めない。しかしそれをすべて写実性ということだけで説明するのは、いささか無理なように感ぜられる。先に指摘した文言の混用や記号の多用など、少なくとも表面的には写実性と距離があるであろう。顔氏は、王文興が口語の真実な記録に意を用いているというが、『家変』のせりふがしばしば写実的でないことは氏自身も認めているのである。右の冒頭部分にしても、「精確」「伝神」の他に、二つの「直」と二つの「轉」が対立呼応する文字遊戯的な側面をみるべきではないか。「写実性」は王文興の文体の重要な特徴ではあるが、特徴のすべてではない。

これに対し、顔氏とやや異なる角度から王文興の文体を積極的に評価しようとする動きは、主に外文系出身の少壮の批評家の間にみられる。張漢良、李有成、張誦聖、鄭恒雄などこのグループは、あるいはラブレーの『ガルガンチュア物語』、ローレンス・スターンの『トリストラムシャンディー』などのいわゆる「ラブレー体小説」における言語運用、就中ジョイスの『ユリシーズ』の影響、あるいはソシュール、レヴィストロースに発する構造主義理論、あるいは、モダニズム、ポストモダニズムなど、近代西洋文学理論との関係を強調することによって、王文興の文体を正当化しようとする。西洋文学に疎い筆者としては、このような見解に対してつけ加えるべき何物ももち合わせていないが、近代西洋文学理論の影響自体については、作者自身、再三言及しており、あやまりのないところであろう。要するに彼らの意見によれば、王文興の文体を中国的伝統によって理解すること自体、そもそも「文類ロジックの失誤」なのであり、彼の小説は中国文学より外国文学との関係の方が密接なのである。この点は、彼の文体が中国語の伝統と相容れない点を非難する側と、実は軌を一にする。両者の相違は、内容についての場合と同じく、またしても同じ事態に対する評価の相違であった。しかし果して本当にそうであろうか。

ほぼ三千年にわたる中国語の文章史の中で、外来の影響あるいはなんらかの内在的必然性によって文体に変化が起こったのは、おそらく数度にとどまらないであろう。王文興の文体は、その特異性、既存の中国語の破壊にもかかわらず、この文体変革の歴史上、決して孤立するものではない、というのが筆者の考えである。

文体変化の第一の波は、まず仏教伝来によって引き起こされた。その実体は今日残される厖大な翻訳仏典についてみることができるが、それは単にサンスクリットの影響にとどまらず、訳経の過程で当時の口語が多量に文章語としてもちこまれた点に特徴がある。最も初期に属する東漢の訳経（二世紀後半―三世紀初）をみると(7)、二字の複合語の大量の増加を認めることができるが、それらは「長養―養長」、「亡失―失亡」、「索尺―尺索」「盗賊―賊盗」のようにしばしば顚倒することが可能である。この現象は、顚倒というよりはむしろ語序の不安定さというべきかもしれないが、一方、先に指摘した王文興の用語における顚倒も、既存の中国語を解体し再構する過程で生みだされた人為的な不安定さとみなすことができよう。この他、訳経の文章には、「何以故？諸経法一味故。」の如き、「故」を後置する特殊な句法が頻繁にあらわれる。この句法が文言の変形なのか、あるいは口語の反映なのかは明かでないが（サンスクリットの影響、もしくはまったく人工的語法の可能性も排除できない）、ともかく非仏教文献にはみえない訳経文章の特徴となっている。訳経文の文体については不明の点が多いが、この中国史上最初の外来の影響による文体の変革が、二十世紀におけるそれといくつかの共通点をもつこと（たとえば外来の影響が口語の使用を促すなど）は興味深い。特に、文学革命以来最も大胆な西方理論による中国語の解体を試みた王文興の場合なおさらである。

次に、さきに列挙した中で、重複、文言と白話の一見不調和な混用、擬態語、擬声語の多用、諺と成語のパロディー的用法、長い句とそこから生まれる独特のリズムなどは、いずれも十三世紀の元代に突如として起こった特異な韻文で

ある元曲の特徴と一致するものであることを指摘したい。元曲の文体についてここで解説する余裕は残念ながらないが、中国韻文学史上まさに革命的な意義を持つこの詩型が、多量の口語と助詞（いわゆる襯字）の使用による冗長な句形により、活発で流動的な独特のリズムと高度の写実性を獲得していることは、すでに文学史の常識に属するであろう(8)。「休休休我勸你這得時人可便休笑恰纔那失時人」（「合汗衫」第一折「賺煞尾」、傍線部は襯字）、「你可敢便打打打這個八十歳病婆娘」（「看銭奴」第三折「金菊香」）など、元曲のこのような特徴がよくあらわれている。筆者は実は日ごろ元曲を研究分野としているものであるが、王文興の小説を読むことによって、元曲の革新性についていささか悟るところがあったことを告白せねばならない。両者の相違は、小説の散文と、おもに戯曲に用いる韻文という点にあるが、王文興がしばしば絵画的（映像的）もしくは詩的手法をとること、さきに述べたとおりであり、一方の元曲また韻文としては、はなはだ散文的である。

元曲が十二世紀以来の、主に北方中国における移民族支配に起因する急激な社会の変動を潜在的要因として生まれたものであることはよく知られれているが、当時この革命的な文体に対する反発は意外なほど少なかったようである。この点から考えると、元曲を一種の古典文学として容認しながら、一方で王文興の文体を排斥する現代の保守的知識人の文学的センスのなさは、笑うべきもののように筆者には思えるのである。元代は口語による筆記が本格的に始まり、さまざまな試行錯誤が行われた時代であるが、「忽被大風將常氏吹過隔岸龍歸村」（『五代周史平話』巻上）のような一見非文法的な句がしばしば登場するのもこの時代の特徴である。（先の（3）特異な語法の最後の例と比較されたい。このような構文は現代の口語にも時にみられる）。

以上に述べた翻訳仏典と元曲には、どちらもそれ以前もしくは同時代の他の分野とはいちじるしく異なる文体の変化

が認められるが、それは特定の個人あるいはグループによって意識的に行われたものではなかった。少なくとも現在の文学史の認識ではそういうことになっている。これに対して、特定の個人、グループによって意識的に文体の改革が行われた代表的な例は、いうまでもなく韓愈を中心とする唐代の古文運動である。

韓愈の詩文が「横空盤硬語」（「薦士」詩）をもって評される難解な表現を好んで用いること、彼がしばしば自分で造語を行ったこと、またその表現上の主張が、「唯だ陳言をこれ務めて去る」（答李翊書）、と「文従い字順やかに各々職を識る」）「南陽樊紹述墓誌銘」）の二点に要約されること、どれもよく知られているであろうが(9)、これらの特徴はすでに見たとおり大体は王文興にも当てはまるといえる。あるいは、王文興には「文従字順」をいう資格はないという人もいるかもしれないが、しかし「努めて陳言を去った」表現が、「文従字順」と認められるまでにはかなりの時間を要するのが常であろう。王文興の文体も、将来におけるその評価は、現在とは自ずと異なったものとなるはずである。韓愈は徹底した国粋復古主義、王文興は極端な欧化現代主義であるが、およそ時流に逆って徹底極端の道を行くものには、その主義の方向にかかわらずしばしば共通点が見いだされるのである。

王文興の文体の種々の特徴は、このように過去の中国にその類例をもつものであるが、しかし筆者はこれによって、王文興が過去の中国文学からなんらかの影響を蒙ったというようなことを主張するつもりは毛頭ない。彼が学んだのは、あくまで現代西方の文学である。右にあげた訳經、元曲、韓愈の中で、王文興が比較的よく知っているのは韓愈であろうが（彼は学生当時古文が得意であったという）、その韓愈からでさえ、彼が何かを学んだとは思えない。にもかかわらず、そこには顕著な類似が存在するということを筆者は言いたいのである。

このことは、古今を問わず、およそ中国語の文章の改革を試みる者は大体同じような道をたどるということを物語る

かもしれない。あるいは、伝統の徹底的否定を図る者こそが伝統の真の継承者たりうる、といってもよいであろうか。

なお念のためにつけ加えると、筆者は右の事実によって、王文興が学んだ現代西方文学理論が、実は過去の中国にも存在したというが如き、「地球はまるいという説は中国にもあった」(10)式の安易な「何でも中国起源論」を展開しようとするものでは無論ない。しかし、文学もしくは言語の普遍性というきわめて危険な概念をぎりぎりのところで受け入れるとすれば、近代西洋における一連の文学的事象が、状況を異にする中国でも起こり得たことは、むしろ当然のような気もする。そもそも古今東西の主な文明言語の中で、中国語の文言ほど文体上のさまざまな実験に適した言語はないであろう。中国語の文言は、その当初よりおそらく口語とは次元を異にするきわめて人工的言語だったのであり、口語の推移に追随するかたちで文言も変化を遂げた日本語などに比べれば、はるかに大胆で創造的な試みを許容する。ジェームズ・ジョイスが中国語を理解しなかったのはまことに残念であると言わねばならない。王文興はおそらくこのことをよく知っているであろう。彼がかくまでに中国語の文字に執着するのは故なしとしないのである。

ちなみに、王文興が注音符号、ローマ字、簡体字などを頻用することについても、ここで簡単に触れてみたい。このような複数の表記体系の併用が、表現の多様性を高める上で大きな効果をもつことは、ひらがな、カタカナ、漢字、Romajiを併用する日本語の場合に徴すれば明らかであろう(たとえば、イトーヨーカドー、Itōyōkadō、いとうやうくわだう、伊藤洋貨堂!)。王文興は日本語を知らないであろうが、もし知っていれば、この手法をより積極的に活用したにちがいない。この問題は、単に王文興もしくは文学的言語についてのみならず、今後の中国語の表記法全体についても重大な示唆をなげかけているように思える。中国語は将来なんらかの形で、漢字とは異なる表音文字体系(拼音でも注音字母でもよい)を部分的に導入せざるを得ないのではないだろうか。なお最近、郷土文学派の中に宋澤来など閩南(台湾)

語で作品をかく作家が現れ、台湾語の助詞などをローマ字で表記しようとする主張がみられるが(11)、王文興の手法と図らずも塗を殊にして同じきに帰しており興味深い。ここでも超右は極左と見解の一致をみるのである。

王文興が、果して「文は八代の衰を興す」現代の韓愈たりうるかどうか、今の時点では語るもおろかであろう。しかし、目下「怪辞は衆を驚かして謗りやまず」(韓愈「寄盧仝」)という状態、かねて「郊寒島瘦」の感もなくはない彼に、現代の盧仝、孟郊、賈島をみるのは、あながち見当はずれでもあるまい。筆者としては彼の果敢な文体実験を、「自ら偉辞を鋳し」つつあるものとして積極的に評価し、今後の成行きを見守ることにしたい。

(四)

王文興文学の真価は、以上にそのあらましを述べた彼の文章によってこそ問われるべきであろう。それはなによりも王文興自身の希望であった。そのことは重々承知の上で、ここでもう一度あえて『家変』の内容に触れてみたい。

『家変』が一種の家庭小説、心理小説、もしくは社会小説として、すぐれた写実性を具えていることはすでに述べた。しかしそれは、文章における写実性と同じく、『家変』の重要な一側面ではあってもそのすべてではない。『家変』にはこの他にある種の象徴的意義があるにちがいないのである。それはとりもなおさず伝統文化と現代文明の葛藤、特に台湾における伝統文化の崩壊もしくは喪失であろう。王文興の、内容はどうでもよいという発言にもかかわらず、彼があえて中国伝統文化の根幹にかかわる「孝」の問題を取りあげたのは偶然とは思えない。そして、この伝統の喪失と崩壊という問題を、今日の台湾を取りまく諸状況の文脈の中でとらえてみると、そこには、張漢良が、「政治的現実と意識形態の衝突の上に形づくられた伝統と故土(大陸)からの隔離の問題」と述べるようなきわめて政治的な側面が浮かび上

がってくるのである。すなわち范曄親子の関係は伝統的中国文化と現代的西洋文明の関係、更には大陸と台湾の歴史的関係に置きかえることができるのであり、「家変」は「国変」を暗示する。

この問題は今日の台湾における最も「敏感な」問題であるだけに、評論の中にこの点を正面からとりあげたものがないのはいた仕方ないが、いささかなりとも台湾の現状に興味を抱く読者であれば、作品の中からある種の寓意を読みとることはさほど困難ではないと思える。たとえば主人公父子の名前、范閩賢と范曄—あれほどまでに文字に執着する作者が、主人公の名前を何の意味もなくつけたとは考え難い。「閩賢」（福建の賢人）の意味するところは明らかであろう。すなわち大陸の伝統文化である。一方の范曄—正史の一つ『後漢書』の著者としてはなはだ有名なこの歴史上の人物の名を借りて、作者は主人公の上に歴史意識を賦与しようとしたのではないだろうか（『家変』での范曄の職業は某大学歴史科助手であった）。さらに范曄が自分の名前を尋ねられ、「日字旁、中華的華字」（15頁）といみじくも答えているように、「曄」は「日」「華」の二字から成るが、日本と中国、この二つの国の間にはさまれた存在、それこそは正に近代における台湾の姿にほかならない。ちなみに、范曄が『後漢書』の著者范曄（三九八—四四五）を意識しての命名であるとする推測が正しければ、彼が、朝廷への謀反を企て子の范蔚ともども刑死する際、范蔚が父に土と果物の皮を擲げて罵倒し、父が「汝は我を恚（いか）るや」と尋ねたのに対し、「今日何に縁（よ）って復た恚らん。但だ父子同じく死す、悲しまざる能わず」と答えたという逸話（『宋書』巻六十九「范曄伝」）も、なにほどかこの命名に影響をあたえていると考えられる。つまり范曄という名には、国家への謀反（国変）と子の父への反逆（「家変」）という二つの面が共に暗示されているのであって、小説『家変』の主人公としてこれ以上ふさわしい名はめったにないと思える。王文興がわざわざこの名を選んだのは必ずや考えがあってのことであろう。

「家変」が「国変」を寓意し、范曄が台湾の運命を象徴するという仮定のもとに、今もう一度この小説を読んでみるとどうなるか。例として最後の部分の大意をここに訳出してみる。

時間はほとんど二年ほども経ったが、彼の父は依然として帰らない。しかし范曄の現在の家庭での彼と母の生活は以前よりずっと愉快であった。時折り父を捜さねばならぬという計画を息子たる彼はほとんど忘れた。彼のこの平和な時間の中で、彼の健康は以前のいかなる時よりも良好で、今や彼の頬はあかくかがやき、しかも彼はすでに中年に近い体格をもっていた。彼の母の方は、髪は更に白くなったものの、それは柔らかな光をたたえた白、健康さをみなぎらせた白であり、その髪からみるかぎり、彼女が更に二十年生きることにはさだめしなんの問題もないであろう。

この一段、一見范曄のエディプスコンプレックスをよそおいながら、その実、范曄すなわち台湾の社会がすでに中年の成熟した段階に達し、母すなわち血縁としての中国人意識は今後も長く残るが、父たる大陸との政治的文化的一体性はもはや不必要であることを語っていると読める。

『家変』は、心理的、社会的に現代台湾人の意識及びその社会を写実的に描くと共に、その全体によってまた台湾自体をも象徴する。王文興が自分の作品は「写実的象徴主義」だといっているのはもっともであろう。そして、文章表現に心血を注ぎ、対象の写実を目指しながら、なおかつそこにある種の寓意、象徴（特に政治的な）をこめようとする彼のこのような文学的態度こそ、中国の知識人が過去二千年間にわたって培ってきたものに他ならない。その意味で、李昂が王文興に「伝統的な中国読書人」の姿をみたのは正しいであろう。

筆者が台湾大学の学生に聞いた話では、王文興は卒業生に記念の揮毫を頼まれると、たわむれに「大家為台湾服務」

（みんなで台湾のために働こう）と書くのが常であるという。彼の小説は徹底した非政治性をよそおいつつ、その実、尖鋭に政治とかかわっているのである。それは彼の意図いかんにかかわらず、現下の台湾で文学活動をつづける者の運命であるとさえ言える。『現代文学』同人中唯一台湾に帰って活動する王文興の心中はさぞ複雑なものであろう。

以上、『家変』を中心とする王文興の作品について筆者なりの考えを述べたが、最後に、台湾以外における王文興評価について簡単に触れて、本文をおえることにしたい。

まず中国本土において、近年台湾文学の研究は、はなはださかんであるが、少なくとも当初の段階での動機が多分に政治的であったこともあり、その紹介は、郷土文学派に厚く、現代文学派に薄い。また同じ現代文学派の中でも、白先勇、於梨華など伝統文学との折衷派にはきわめて好意的であるが、王文興、七等生ら純粋な現代文学派はほぼ全面的にこれを否定する。たとえば、『台湾小説選』（人民文学出版社　一九七九）は、現代派では白先勇と於梨華を一篇ずつ取るのみであるし、『台湾作家小説選集』（中国社会科学出版社）は第三冊（一九八二）に、白先勇、於梨華各四篇と共にわずか一篇、王文興の「黒衣」（『十五篇小説』中の一篇）を収め、かつ『家変』についての否定的な紹介を載せる。また封祖盛著『台湾小説主要流派初探』（福建人民出版社　一九八三）は、この種の研究書としてはもっともまとまったものであろうが、第一部分「郷土派小説」第二部分「現代派小説」のうち現代派については、これを更に広義と狭義に二分し、広義の現代派に属する白先勇らを積極的に評価する一方、狭義現代派の王文興らの作品は、西洋文明におかされ伝統文化から遊離した台湾社会のいびつな反映であるとして評価しない。

白先勇の作品が中国本土できわめて好評なのはある意味で当然と思える。彼の作品、特に『台北人』の主題は、一言でいえば「今昔之感」、あるいは「悲劇的な美」ということになろうが、一種の「敗者の文学」であることは否めない。

過去の文学の中で、彼の作品にもっとも似るのはおそらく李後主の詞であろう。国民党の宿将、白崇禧の息子である彼は、文学的にはまさに「白後主」たるに恥じないのである。伝統と現代をほどよく調和させたその文体ともども、大陸側としては台湾の作家中もっとも歓迎すべき存在であるに違いない。政治的に台湾独立に走る可能性のある一部の郷土派よりは、むしろ彼の方が安心して読めるのではないだろうか（封祖盛は「白先勇の作品は祖国の平和統一の役に立つ」と言っている）。筆者の台北滞在中、たまたま帰国した白先勇と、同じく台湾大学出身の在米文芸批評家でシカゴ大学教授李欧梵を囲んでの座談会が台湾大学外文系の主催で開かれたが、席上、白先勇が、最近は元初の宋の遺民の詩を読んでいると述べたのが印象深かった。また、なぜ帰国して活動しないのかという一学生の質問に対して、彼はついに明確な回答をあたえなかった。彼のこのような処世と人生観は、むろん国民党重鎮の息子という特殊な境遇に多くを負うであろうが、もう一つ、彼の一族の出自とも無関係でないように思える。白先勇が白崇禧の子である事ほどは広く知られていないが、彼ら白氏一族は広西の回教徒である。白先勇が純粋の漢民族でないことは、彼の容貌をみれば明らかであり、おそらく過去のある時期における中央アジアからの移民の子孫であろう。彼の先祖が、政治的もしくはそのほかの理由によって故土を離れ中国へやってきたように、彼は大陸から台湾へ、そして更に米大陸へと渡ったのであった。今後彼がアメリカでどのような活躍を示すかは、歴史的見地からいっても非常に興味深い。

ちなみに出自ということでいえば、王文興が福州人であることも注意に値する。王文興が西洋文芸思想の中国への導入にかくまで熱心なのは、彼自身の資質や現代台湾社会の特殊な事情に原因があろうが、彼が福州人であることはまた、近代における西洋文化の入口としてのこの港の役割を容易に連想させるのである。清末以来の西洋思想と文学の紹介において福州の果たした役割の重要性については、かの厳復と林琴南が共に福州人であったことを指摘するだけで足りる

であろう（ただしこの二人は桐城古文家であったが）。

現下の大陸における王文興の評価は、おおむね否定的である。しかし否定的は否定的なりに認識は深まっているように思える。たとえば最近出た『現代台湾文学史』（遼寧大学出版社　一九八七）は、おそらく台湾をも含めてこれまで出た中でもっとも大部の台湾文学史であろうが（この書物がなぜか東北地方で編纂出版されたことに筆者は興味を覚える）、その中で王文興と『家変』は相当詳しく紹介されている。中でも、「現在本当の現代文学派としてなお作品を書いているのは王文興一人だけだ」という指摘、そして、「現代主義のレンガと瓦を借りて来て、自分の民族の歴史的基礎のない沙地の上に文化の殿堂を建てようとする試みは、絶対不可能な空想だ」という総括は、ある意味で王文興の本質をよく理解した上での発言であるといわねばならない、中国の現代化と開放が順調に進めば、近い将来、王文興の作品が今とはちがったニュアンスで受け入れられる可能性も大いにありえよう。『文藝研究』一九八八年四月号に張誦聖の「現代主義与台湾現代派小説」が載ったことは、そういう意味で画期的である。張氏は王文興文学の少数の熱心な賛美者の一人だからである。

これに比べると、日本では、王文興はほとんど黙殺されているに等しい。たとえば松永正義他訳『台湾現代小説選Ⅰ―彩鳳の夢』は、ほぼ郷土文学派の主張に沿っての選集であり、むろん王文興の作品は収められず、解説の中で、「内容、文体ともに破格な小説『家変』で評判になった」ことと郷土文学を攻撃した点に触れるにとどまる。この選集には、現代派としては唯一、白先勇の「冬の夜」という『台北人』の中でもどちらかというと出来の悪い短篇が取られているが、これについて訳者は、作品選択の基準として、「一つは独立した文学作品としての鑑賞に耐えるもの、もう一つは多様な題材のものを選び、台湾の社会のありさまを見渡せるよう配慮すること」を挙げ、第二の理由から、異質の白先勇の作

品をあえてとった、と述べる。これによると、訳者は、白先勇の作品は異質で、独立した文学作品としての鑑賞に堪えるものではないと思っているらしい。この見解は、白先勇を「現代的伝統的作家」（『現代台湾文学史』）として特にその芸術性を賞賛する中国側の評価と好対照をなす。

この他に、『家変』についておそらく唯一の評論として、李欧梵・陸士清著、藤井美恵子訳「『家変』についての対話」（『未名』第六号　一九八七）がある。この「対話」は初出が示されていないので詳しいことは分からないが、内容をみると前出の李欧梵が一九八六年上海を訪問した際、復旦大学副教授の陸士清と常州にいく汽車の中で交わした対話を、陸氏がのちに整理したものらしい。対話の内容は、陸氏が『家変』をめぐる中国国内での論争を踏まえた上で倫理小説、教育小説等々の観点からかなり肯定的な意見を述べるのに対し、李氏が適当に相槌を打ちコメントするといった態のもので、最近の中国における『家変』認識の深まりを知る上での一助とはなるものの、要するに車上の閑談にすぎず、しかも二人の対話は実はあまりかみ合っていない。「陸―さらに人物の心理はまともではなく言葉も目茶苦茶でした。だが『家変』を読んだ多くの高度な読者はみな好んでいます。もちろんこのような言葉を用いずに書くこともできますが、福州方言の成分が多いですね。李―ほう！」といった調子で、なんだかよくわからない。

『家変』についてはすでに台湾で多くの論文が発表されていることさきに述べた通りだが、せっかく初めてこの作品を日本に紹介するのに、なぜそれらの論文は顧みず、この車上ノラクラ対談を訳出したのか、全く理解に苦しむところである。近年、台湾文学に対する関心が高まってきたことはもとより歓迎すべきであるが、ごく一部に、台湾文学を理解するのに、台湾自体での論調に目をむけず大陸における研究動向の把握にのみ汲々とする風潮が見えるのは寒心にたえない。

王文興は、現代台湾文学の、そしてさらに現代中国文学の異端兒である。しかし文学の新たなる天地が常に異端兒によって切り拓かれてきたことは、ここであらためて述べるまでもあるまい。彼は中国文学史上稀にみる大胆にして創造的な文学的実験を試みつつあるが、この実験は、たとえそれが失敗に帰するとしても壮観であるにちがいない。現代台湾文学、現代中国文学だけでなく、広く中国文学における伝統と革新に関心を抱くより多くの人々に、王文興の作品が読まれることを願って、このきわめて主観的な紹介をおえることにしたい。

注

（1）以下、台湾で出た王文興に関する論文のうち管見に入ったものを挙げる。本文中の引用、言及はすべてこれによる。

顔元叔「苦読細品談『家変』」（『中外文学』民国六十二年〔一九七三〕四月号）

欧陽子「論『家変』之結構形式与文字句法」（同右　民国六十二年五月号）

張漢良「浅談『家変』的文字」（同右　民国六十二年五月号）「家変座談会」（同右　民国六十二年六月）

陳典義「『家変』的人生観照与嘲諷」（同右　民国六十二年七月）

李昂「長跑選手的孤寂—王文興訪問録」（同右　民国六十四年〔一九七五〕十月号）

劉紹銘「十年来的台湾小説……一九六五—七五—兼論王文興的『家変』」（同右　民国六十五年〔一九七六〕五月号）

姚欣進「論析『家変』之情節安排芸術」（同右）

李有成「王文興与西方文類」（同右　民国七十一年〔一九八二〕四月号）

鄭恒雄「文体的語言的基礎—論王文興的『背海的人』」（同右　民国七十五年〔一九八六〕六月号）

張誦聖著・謝恵英訳「王文興小説中的芸術和宗教追尋」（同右　民国七十五年十一月号）

呂正恵・蔡英俊・陳万益「没有出路的英雄—王文興論」（『文星』一〇二期　民国七十五年十二月）

『中外文学』所載の資料は、台湾大学中文系研究生の原啓子氏よりコピーを頂いた。

（2）（3）劉紹銘前掲論文参照

（4）調景嶺は、香港における国民党関係者の居住地としてきわめて特異な区域である。

(5) 王文興「郷土文学的功与過」(尉天聰編『郷土文学討論集』遠流長橋聯合発行部　一九七八　台北) 参照。
(6) 志村良治『中国中世語法史研究』(三冬社　一九八四) 第二部　一、「這と那」を参照。
(7) E. Zurcher著　蔣紹愚訳「最早的仏経訳文中的東漢口語成分」(『語言学論叢』第十四輯　商務印書館) 参照。
(8) 吉川幸次郎『元雑劇研究』(『吉川幸次郎全集』第十四巻　筑摩書房　昭和四十三年) 下篇第三章と第四章を参照。
(9) 清水茂『韓愈』(『中国詩人選集』11　岩波書店) の解説参照。
(10) 皮錫瑞『経学歴史』二、経学流伝時代をみよ。
(11) 松永正義「台湾語による文学」(『中国語』三四七号　大修館　一九八八年十一月) 参照。